

# 大学移転と学生

## — 移転学部における追跡調査から —

保健管理センター 中丸 澄子

〈はじめに〉

人はその生涯の中で、いくつもの状況の変化と出会う。出生はその最たるものであるが、入学、卒業、就職、結婚、転居、昇進、親しい人との離別や死別など、大きなものだけでも数えれば切りがないだろう。このような、ある状況から別の状況への移行は、それが様々な点からみてその人にとって望ましい方向への変化であっても、必ずストレスを伴い、新しい状況に慣れるまでに多少の時間を要するものである。大学のキャンパス移転もそのひとつである。就職や結婚のように、まったく新しい役割を担うことになったり、人間関係を根底から変えてしまうような大きな移行ではないにしても、居住地の自然的・物理的環境、近隣社会との関係、私的人間関係のネットワーク、活動パターンなどに、程度の差こそあれ変化を生じざる

を得ないだろう。学生達はそれらの変化にどのように対応し、新環境を受容していくのだろうか。特に、移転当初の学生の精神保健にいかなる影響が現れるであろうか。筆者らは、移転による学生の精神保健と適応過程に焦点をあて、生物生産学部と教育学部において、2年間に亘る追跡調査を行った。筆者らは本学の移転の特徴を、①高度に市街化され、刺激や情報にあふれた都市から、あまり市街化されず自然を豊かに残した環境への移行であること、②大学との相互依存の長い歴史を持つ地域から、未だ大学との結びつきの日の浅い地域への移行であること、としてとらえ、この変化が学生にどのように受けとめられ、いかなるプロセスを経て新しい環境とつながっていくかに関心を向けた。また、個々の適応の良否にかかわる仮説的なパラメーターとして、①キャン

パス移転に対する態度（肯定的か否定的か）、②移転前の居住地域との結びつきの強さ（生活の満足感、地域での人間関係、活動状況、近隣との接点、対人認知など：これらは個人の社会的スキルを反映すると思われる）、③移転による喪失体験の有無、④移転による喪失体験の有無、⑤移転による喪失体験の有無、⑥移転による喪失体験の有無、⑦移転による喪失体験の有無、⑧移転による喪失体験の有無、⑨移転による喪失体験の有無、⑩移転による喪失体験の有無、⑪移転による喪失体験の有無、⑫移転による喪失体験の有無、⑬移転による喪失体験の有無、⑭移転による喪失体験の有無、⑮移転による喪失体験の有無、⑯移転による喪失体験の有無、⑰移転による喪失体験の有無、⑱移転による喪失体験の有無、⑲移転による喪失体験の有無、⑳移転による喪失体験の有無、㉑移転による喪失体験の有無、㉒移転による喪失体験の有無、㉓移転による喪失体験の有無、㉔移転による喪失体験の有無、㉕移転による喪失体験の有無、㉖移転による喪失体験の有無、㉗移転による喪失体験の有無、㉘移転による喪失体験の有無、㉙移転による喪失体験の有無、㉚移転による喪失体験の有無、㉛移転による喪失体験の有無、㉜移転による喪失体験の有無、㉝移転による喪失体験の有無、㉞移転による喪失体験の有無、㉟移転による喪失体験の有無、㊱移転による喪失体験の有無、㊲移転による喪失体験の有無、㊳移転による喪失体験の有無、㊴移転による喪失体験の有無、㊵移転による喪失体験の有無、㊶移転による喪失体験の有無、㊷移転による喪失体験の有無、㊸移転による喪失体験の有無、㊹移転による喪失体験の有無、㊺移転による喪失体験の有無、㊻移転による喪失体験の有無、㊼移転による喪失体験の有無、㊽移転による喪失体験の有無、㊾移転による喪失体験の有無、㊿移転による喪失体験の有無、

（調査結果から）  
ページ数の関係上、主だった結果のみかいつまんで述べる。  
1 キャンパス移転をめぐる態度  
移転によって生活環境が変わることによる不安を感じるという学生は

65%にのぼり、不安の内容は、住居、交通、アルバイト、経済上の問題と生活に密着したものが多かった。新キャンパスでの学生生活に対する期待感については、あまり期待していなかったという回答が全体では期待していたという回答を若干上回ったが、学年が進むにつれて期待していたという学生が増えており、特に研究設備への期待が増大していた。次に、できれば移転しない方がよいと思っただことがあるか、という質問に対して、全体の80%以上が「常々思っていた」あるいは「時々思った」と答えており、大多数が移転に対し消極的であったのがうかがわれた。

### 2 移転6ヶ月後の状況

#### ①生活の変化

生物生産学部においても、教育学部においても、移転後の生活に対する満足感は、移転前に比べて大幅に減少している。特に不満な事柄として、近所に商店街がなく買い物に不便なこと、サークル活動が十分にできないこと、授業以外の時間を過ごす適当な場所がないことがあげられていた。駐車場の少なさを不満として挙げていた

のは、生物生産学部では60%以上であったが、後に移転した教育学部生では20%以下になっており、この面での改善は明らかであった。クラブやサークル活動、アルバイトをやめたという学生も多く、特に4年生や院生に多く見られた。交友頻度も移転前に比べて減少し、やはり院生にその落ち込みが激しい。移転直後の未だ生活が軌道に乗っていない時期ではあるが、クラブやサークル活動をやめなければならなかったことは、気分のリフレッシュする機会や気持ちの張りを失うという点で、またアルバイトをやめたことは経済的な面で、学生の生活を揺るがしていることが想像された。特に卒論や実験に追われる4年生や院生は、交遊頻度や外出頻度の減少とも相まって一種の閉塞状況にある学生も多いのではないかと憂慮された。

#### ②地域とのつながり

地域で親しくしている人の有無、地域の人達の広大生に対する印象の評定、地域の人達に対する印象の評定では、移転前後に大きな差が見られた。移転前は、地域で親しくしている人が数人以上いる学生は6割強であったのに、移転後

は2割程度に減少した。次に、地域の人が大生に対してどのような印象を持っているかについての評定は、移転前の居住地の人達は、「非常に好意的」「まあまあ好意的」という回答が79%、「あまり良く思っていない」「良く思っていない」は合わせて僅か2%であったのに対し、移転後の西条地区の人達は、「非常に好意的」「まあまあ好意的」は47%に減少し、逆に「あまり良く思っていない」「良く思っていない」が14%に上昇していた。また地域の人はどのように感じているかの評定では、移転前居住地については、「親しみを感じていた」という回答が「親しみを感じていなかった」という回答の倍以上であったのに、移転後居住地の人達には「親しみを感じていない」という回答が「親しみを感じている」回答を上回っている。最後に、新キャンパスの魅力を感じる質問では、「あまり魅力を感じない」「ほとんど魅力を感じない」を合わせると87%と圧倒的多数に達し、我々の気を重くさせた。

③ 移転に伴う喪失体験の有無  
有形・無形を問わず、移転によって失ったと感じるものがあるかという質問に対し、8割以上の学生が「ある」と答えていた。失ったものの内容は、「生活の便利さ」「文化的刺激」「アルバイト」「住み心地の良さ」を挙げるものが多い、都市を離れたことの影響が色濃く現れていた。学年や性別によっても差が見られ、院生は「勉学・研究面の利便性」を挙げるものが多く、女子は「精神的安定」男子では「気晴らしの場所」が多く挙げられていた。次に、失われたものの重みを問う質問では、失われたものが、「非常に大切」「かなり大切」という回答を合わせると80%にのぼり、この喪失体験が決して軽いものではないことを物語っていた。

③ 適応状況  
新キャンパスでの適応の指標として、移転後居住地とのつながりの強さ・受容度、及び心身の健康状態を質問紙の回答パターンからある方法で得点化した。その結果、我々が予想していたように、移転後の適応の良否は、移転に対する否定的な態度、移転による何等かの喪失体験の有無とかわりを持つことが証明された。即ち、移転

に對し否定的な態度を持つ学生はそうでない学生よりも、これらの指標から見た適応が悪く、また、移転によって何等かの喪失を体験した学生は体験していない学生よりも適応が悪いことが見いだされた。しかし、移転前居住地とのつながりの強さは心身の健康状態の良さとは高い相関を示す一方、移転後居住地とのつながりの強さとの関連は、移転6ヶ月後のこの時点では明確ではなかった。ここで、移転に対する否定的な態度(抵抗)の強さは、移転前の居住地地域とのつながりの強さとも関連があり、移転前の地域と良い関係を持ち、満足度が高いが故に移転に抵抗を示すという学生群の存在も予想させた。そこで、このような、移転前の地域と良い関係を形成していたがために移転に否定的と思われる学生と、移転前地域と強くつながっていたわけではないが、移転は不安という学生とは、その後適応プロセスに相違を生じてくることが想像された。果たして、それから6ヶ月後にはいかに変化したのであるか。

① 生活への満足感の変化  
3 移転1年後の変化  
② 地域とのかかわりの変化  
1 回目調査を引き、かつ、喜ばしく感じたのは、西条地区の人が大生に持つ好意の印象に関する認知の positive な変化である。

② 地域とのかかわりの変化  
1 回目調査を引き、かつ、喜ばしく感じたのは、西条地区の人が大生に持つ好意の印象に関する認知の positive な変化である。

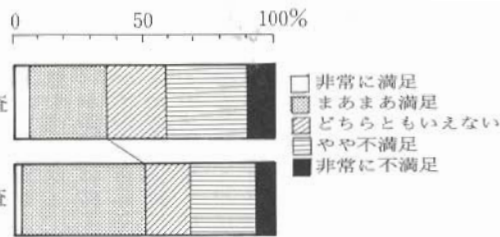


図1 居住環境への満足感の変化

していたと思われる学生は特に好意的な方向に認知を変化させ、地域での人的つながりを積極的に作り始め、適応が促進されているのがうかがわれた。しかし、移転前の地域とのつながりがあり、移転前でない学生は、目立った変化は見られなかった(図3)。このことから、移転後の良好な適応を予測する鍵となるパラメーターは、かつて暮らしていた地域とのつながりの強さ・かわりの豊かさであり、その背後に、個人の持つ、周囲とかわっていく「三」の良さがあ

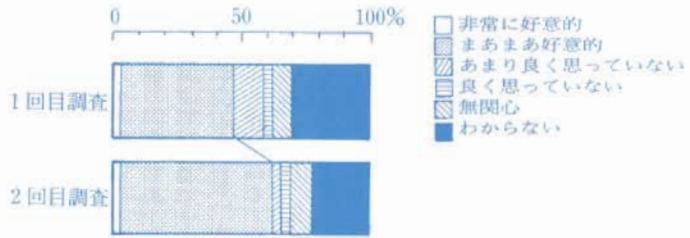


図2 西条地区の人々が広大生に対してもつ印象の評定の変化

ることが推測された。  
 ③心身の健康状態  
 心身の自覚症状は、前回に比べさほど大きな変化は見られなかったが、一つ注目されたのは、漠然としただるさや、疲労感の訴えが有意に減少していることであった。この自覚症状はストレスの敏感な指標と考えられることから、移転直後の新環境でのストレスは軽減しているのではないかと思われる。しかし、「気持ちが悪安定」、「気分には波がある」、「イライラしたり怒りっぽい」、「人の視線が気になる」

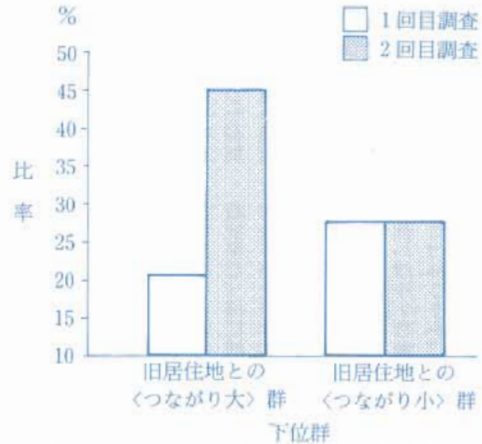


図3 西条地区の「大学の友人以外に親しくしている人がいる」と回答した学生の比率の変化

る、「憂うつで悲観的になることがある」、「孤独感や寂しさを感じる」、「生き生きと仕事や勉強ができない」、などの自覚症状項目に、過半数がしばしば、または時々ある、と答えており、新キャンパスでの学生の精神保健には気掛かりな点も多い。

（キャンパス移転がもたらしたものの）  
 以上の追跡調査の結果をふまえ、若干の考察を試みたい。

1 環境の刺激量の減少

アセスメントを行ったいづれの学部、いずれの時期においても、学生達の約8割が、移転によって喪失したものが、と回答し、その筆頭として、「文化的刺激」の喪失を挙げた。しかも、その率は移転後の時間の経過とともに増加し、さらに失ったものは非常に大切とする回答も増大している。これほどまでに学生達は、精神を賦活してくれる新鮮な刺激から遠のいたことを痛切に感じているのである。勿論、自ら求めれば学園の中でそれらに出会うことも可能であろうし、少し動けば都市は間近にある。しかし、動かずとも刺激や情報が勝手に降り注いでくる都市の生活に慣れた若者にとって、動かずには刺激や情報の得られない新環境は物足りなく、感覚奪取的な危機感さえ感じるようである。人が生き生きとした充実感をもって活動に動機づけられるためには、即ち、適正な覚醒水準を維持するために、それに最適な内的・外的刺激量が必要である。その最適レベルは個体の生理的・心理的条件と活動の種類によって決定されるが、その個体がこれまでどの程度の刺激にさらされてきたか

によるところも大きい。環境移行による刺激量の減少は、その水準に順応するまでに相当の時間を要すると思われる。刺激量・情報量の環境からの供給の減少が、どのような身体的・心理的問題として出現するかについては、この一連のアセスメントでは明確に検出できなかったが、興味深い課題として残されている。

2 地域とのかかわりを巡って  
 先述したように、新しく参入した地域社会の人々に対する認知のPositiveな方向への変化が、新環境の受容へ向かう第一歩となり、地域社会と良いかかわりを持ち始めた学生は、新しい環境での満足感を高めている。逆に、地域と良いかかわりを持っていない学生は学内での適応も思わしくない。対人スキルが適応の鍵になっていると言える。このことは、人が単一の閉ざされた社会だけでは、たとえそれがいかに理想的に整備されていたとしても、健康で充実した生活ができなことを、見事に示している。移転前の広大は、大学を取り囲む「町」と長いかわりの歴史を持ち、相互依存的に相携えて歩んできた。大学の回りには、学

生のたむろする飲食街があり、古本屋があり、銭湯があり、学生下宿がかたまる学生街があった。西欧の中世以来の伝統を持つ古い大学、また、我が国でも、古い伝統を持つ大学のまわりには、大学と地域とが一体となった独特の雰囲気を持つ個性的な「町」が形成されている。「町」の人達は学生とのつきあいに慣れ、接し方を心得ていて、万一の場合の親代わりともなり、サポートシステムの役割を果たしてくれた。生活技術の未熟な学生にとって、下宿の大家さんや、いきつけの商店街のおじさん、おばさんは大きな支えになっていたと思う。このような「町」とのかかわりも失ったことは、想像していた以上に重い意味をもっているように思われる。人は、特に青年は、いろいろな職業の、いろいろな階層の、いろいろな考え方をもつ人々と触れ合うことが必要である。これは切り離された大学社会のただけに居ては得られない。

生達が積極的にその中に入っていく、地域の人々の生活に触れ、それまで知らなかった何かに出会うことができた。それほど経験の幅が広がることだろう。学生寮や学生アパートに切り離されて住むだけでなく、例えば農作業を手伝ったり、様々なボランティア活動を通じて地域の人々と体験を共にしてきたら、どれほど豊かな大学生活になることだろう。

移転後の広大と西条の町とは、やつとそこのかかわりの緒についているところである。まだ双方にとまどいや緊張があり、摩擦も生じているようである。大学と地域の相互乗り入れがもっと活発になり、両者が幸福な関係で船出して、大学と地域が一体となった、住み心地の良い町が形成されていくことが、切に望まれる。

維持できる町を  
若く、好奇心にあふれた大学生にとって、その精神の賦活を維持するために、ある程度の外的刺激が必要である。学生達は文化的刺激や気晴らしの場所に飢えている。現在の東広島市には、文化施設や、学生が気分転換できる娯楽の場所があまりにも少ない。音楽や演劇、講演会などのための多目的ホールや美術館、県内に限らず、各地の大学や市民団体が自由に利用できるセミナーハウスなどの建設が望まれる。また、学生が居住する区域内に健全な喫茶店や居酒屋も、もっとあって良いだろう。

2 大学と地域社会の相互乗り入れをもっと活発に  
現在、学生寮や学生アパートの集まる区域と西条の町との間に距離がありすぎるように思われる。買い物に不便というだけでなく、学生達の多くが西条の地域社会と殆ど触れることなく卒業していくことになる。この距離をもっと縮められないものだろうか。学生が最も多く西条の町とかかわるのは、アルバイトを通してであろうが、他にも、ボランティア団体の組織作りや、市民のための公開講座、文化的催し、スポーツ大会など、大学と自治体が協力して進める計画がもっとあってよい。

3 地域に学生のサポートシステムを  
本文でも触れたように、学生下宿の大家さんや、行きつけの商店街のおじさん、おばさんなど、学生が困った時に智慧を貸してくれる学外サポートシステムがかつての学生街にはあったが、移転後の新キャンパスには未だ形成されていない。数こそ少ないが、見えない程、衣食住を始めとする生活技術が未熟で、かつ孤独に対する耐性の弱い若い学生もおり、彼らにとって移転は大きな不安源であり、また危機ともなりうる。学内の相談機関は、現在のような、新旧両キャンパスをカバーしなければならぬ過渡期的状況の中では、対応が間に合わない場合も起こり得る。教官・職員を含めた援助のネットワークの強化と、ピアカウンセラーの養成など、対策を具体化していくことは急務であるが、学外サポートシステムとして、一定の距離から学生を見守ってくれるホストファミリーの登録制度など、考えられないだろうか。これは決して、学生援助の役割を担う我々が手抜きをしたためではない。青年の人格形成に地域社会の果たす役割がいかに大きいかを感じることである。

参考文献  
(1)中丸澄子他 一九八八 大学移転と環境移行に関する研究(1): 予想される精神衛生上の問題 総合保健科学 四、一―一二  
(2)中丸澄子他 一九八九 大学移転と環境移行に関する研究(2): 移転6ヶ月後の広島大学学生の 実態調査 総合保健科学 五、四一―五〇  
(3)中丸澄子他 一九九〇 大学移転と環境移行に関する研究(3): 移転1年後の大学生の認知的・適応的变化 総合保健科学 六、四一―四七  
(4)中丸澄子他 一九九一 大学移転と環境移行に関する研究(4): 移転した2学部における調査に基づく環境心理学的考察 総合保健科学 七、五一―六一